

## 2. 「枕草子」(現代語訳)

はる あけぼの ひ のぼ しろ やま あた そら すこ あか  
春は曙。日が昇るにつれてだんだんと白くなる、その山の辺りの空が少し明る  
くなって、紫がかっている雲が細くたなびいている様子がいい。

なつ よる つき で い やみよ ほたる おお と か  
夏は夜。月が出ているときは言うまでもない。闇夜であっても、蛍が多く飛び交  
っている様子もいい。また、ほんの一、二匹が、ほのかに少し光って飛んでいくの  
も趣がある。そんな夜には、雨など降っても風情がある。

あき ゆうぐ ゆうひ やま は ちか ころ からす い  
秋は夕暮れ。夕日がさして山の端にとても近くなっている頃に、鳥がねぐらへ行  
こうと、三羽四羽、二羽三羽と飛び急いでいる様子さえ、しみじみとした情緒があ  
る。まして雁などが連なって、とても小さく見えるのは実に趣がある。日が落ち  
てから、風の音、虫の音などが聞こえるのは、やはり何とも言えないものだ。

ふゆ そうちょう ゆき ふ あさ い しも お あた いちめん しろ  
冬は早朝。雪が降っている朝は言うまでもない。霜が降りて辺り一面が白くなっ  
ているのも、またそうでなくても、とても寒い朝に、火などを急いでおこして、炭を  
持ち運ぶのも、冬の朝にふさわしい。昼になり、寒さがだんだん緩んでいくと、火桶  
の炭も白い灰が目立ってきて感じ悪い。

にく いそ ようじ とき き ながばなし きやく  
憎らしいもの。急ぎの用事がある時に来て、長話をする客。それがどうでもい  
いような人なら、「後でまた」と言っても帰すこともできるが、さすがに遠慮すべ  
き立派な人にはそうもできず、本当に憎らしく不愉快だ。

たにん うらや じぶん み うえ なげ たにん い  
他人を羨ましがり、自分の身の上を嘆き、他人のことをあれこれ言い、ちょっと  
したことも知りたがり聞きたがったりして、言ってくれないと恨んで、悪口を言い、  
また、ちょっと聞きかじったことを、自分が前から知っていたかのように他人に調子

よく話<sup>はな</sup>すのもとても憎<sup>にく</sup>らしい。

心<sup>こころ</sup>がときめくもの。雀<sup>すずめ</sup>の子<sup>こ</sup>を飼<sup>か</sup>うこと。小<sup>ちい</sup>さい子<sup>こども</sup>供<sup>ども</sup>を遊<sup>あそ</sup>ばせている所<sup>ところ</sup>の前<sup>まえ</sup>を通<sup>とお</sup>ること。上<sup>じょうひん</sup>品<sup>ひん</sup>な香<sup>かう</sup>をたいて、ひとり横<sup>よこ</sup>になつているとき。髪<sup>かみ</sup>を洗<sup>あら</sup>い、化<sup>け</sup>粧<sup>しょう</sup>をして、香<sup>かう</sup>の薫<sup>かお</sup>りがしみた着<sup>き</sup>物<sup>もの</sup>などを着<sup>き</sup>たとき。特<sup>とく</sup>に見<sup>み</sup>てくれる人<sup>ひと</sup>がいなくても、心<sup>こころ</sup>の中<sup>なか</sup>はやはりとても快<sup>こころよ</sup>い。